

# わかり合えなあの 再考学

## どうしたら「ちがったまま」共にいれるのだろう？

2025年冬、わたしたちは性差から生まれる「もやもや」の中を未だ漂っている。家庭の中で、働く場所で、また何気ない日常で、「なんとなく」かつ「歴然と」それは存在し続けている。そこにある「もやもや」には、それを生み出す背景が必ず

あるはずで、今回はその背景を「家父長制」という言葉をキーワードに解き明かしてみたい。「わかり合えな」の構造を知ることによって改めて模索する、「尊重し合える」世界。わたしたちが「ちがった」まま共にあるには、どうしたいのだろう？

### ISSUE 1

### What's 「家父長制」？

例えば結婚している2人が連名で名前を書くときに、どちらの名前を先に書くだろう？「なんとなく」夫の名前を先に書くとしたら、その「なんとなく」には理由がある。もし女性同士や男性同士で連名にするなら、その状況に応じてきっと話し合いが持たれるだろう。それなのになぜ「なんとなく」夫の名前を先に書くのか？ そうするメンタルの背景にはもはや無意識とも言える「家父長制」の影響がある。

「家父長制」とは、一言で言えば「男性が支配的な立場にある構造」のことだ。「家」、そして「父」という漢字が入っていることから分かるように、この根本には家族とジェンダーのシステムがある。日本では、1898年に施行された明治民法において、男性の家長

(戸主)を1番上に置き、その下に卑属、傍系、女性という親族集団を配列する「家制度」が作られた。戦後、この制度は法的には解体され、夫妻は「同等の権利を有する」とされたが、今もまだ男性優位な「家」の意識は根強く残っている。夫の名前を先に書くメンタリティと夫による妻へのモラルハラスメントの距離は非常に近く、さらに世界的にみて日本の女性の企業代表や議員が著しく少ないことも大いに関係がある。それぞれにちがう身体、ジェンダー、セクシャリティを持つ中で、その「ちがいはなくなることはない。その「ちがいを認め合うことが難しく、「わかり合えない」のはなぜか？それを阻む要因の1つとして、「家父長制」は、日々の暮らしの中でいまでも依然として「ある」。それが「ある」ことを知ることが、「わかり合える」世界への最初の1歩であるのかもしれない。

〈株式会社一条工務店〉

「共働き夫婦の家事シェアに関する意識調査2024」

● 女性の家での家事分担比率

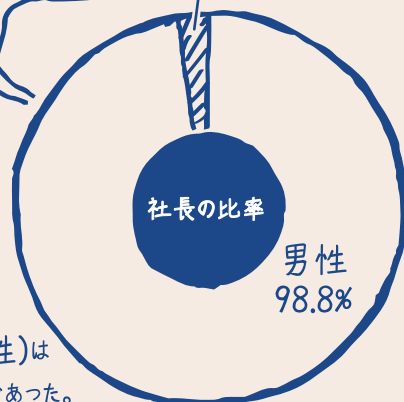


女性の約68%が家事の7割以上を担当。

〈株式会社日本総合研究所〉  
「取締役会のジェンダー  
バランス調査  
(2024年度版)」

女性  
1.2%

こんなデータが  
あります。



プライム &  
スタンダード市場に  
おける社長(女性)は  
39人(1.2%)であった。